



突発短編

Triumph onedollar

～勝利への放浪者～
＋読みきり短編

リューヤ

ハイエドラゴン退治の仕事を終えたほんの数日後の話である。

一行はグレネドへ向かう前に、とある町へ到着していた。町の名は「トンプソン」、特に秀でた特徴のない平凡なただの町だ。ここで燃料の補給と一緒に骨休めのためにこの街で一泊することを決めていた。ここから先の砂漠越えの辛さは虎眼がよく知っており、町や村を近くで見つけたら必ずそこへ向かうように話を進め今日ここに来た次第なのだ。

車の整備、補給、補強、その他もろもろに関してはこの街の業者に委託し、5人はここで実にゆるりとした時間を過ごしていた。

「スゥ……プゥ～……平和だな」

「だな……暑いけどな」

「それを言うなよ」

コートを肩に引っ掛けてタバコをゆっくりとふかすジン、その向かいでメガネをかけて本を読むジェット。珍しいこの組み合わせが居るのは町の中に一軒だけある茶屋だ。テーブルの上にはお互いが注文したアイスコーヒーと冷茶がグラスの表面に汗をかきながら置かれている。

「……暇だな」

「アタシや暇じゃねえぞ」

「お前何読んでんの？」

「貸本屋でな、面白い魔術書があったから借りてきたんだ」

「勉強熱心なこって……ダリィ……つかなんでお前メガネかけてんだ？キャラ被んだろうが」

「集中して読みたい時だけかけんだよ、お前みたいにアタシや近眼じゃないっつーの」

「近眼なめんなよ……あとオレの目は乱視も交じってる」

「なお悪いわボケ、静かにしてろ」

「ああ……ダリィ」

この熱砂の大陸でわずかな涼を求めドクターに勧められるままにこの店に入ったはいいが、ここは日差しは差し込むし吹いてくる風は太陽に熱せられて生温いのなんのって・・・暑がりにとって余計イライラする環境だ。

ジンは冷茶の入ったグラスをつかみ、中身を一気に飲み干すと今度はかき氷を注文した。ジェットはもう意識が本の中に溶け込み周りが見えてなくなっている様子で、汗が流れても拭き取ろうとせずじっと目を本の中で泳がせている。随分な集中力だことと感心しつつ、テーブルに届いたかき氷を口の中いっぱいにかき込んだ。当然その次にはお決まりの頭痛が襲い表情を曇らせることになる。

町の外は今日も風が吹き、砂が舞い散っている。その砂の向こうから一つの影がゆっくりと歩きながら出てきた。白いマントと頭巾で身を包むこの者は町の目の前までたどり着くと、わずかに顔を持ち上げスンスンと何かの匂いを嗅ぐ。

・・・匂いはした。この町には、探し続けていたあの匂いがいる。

「クスクスクス…ついに見つけた」

ジンのたばこの吸い殻は、すでに灰皿から零れ落ちてしまいうくらいたまり続けている。趣味が少ないジンにとって唯一の楽しみはタバコしかないのは仕方ないとしても、こうしてただ吸い続けるのもなんだか味気がなくなってきた。今はとにかくひたすらに退屈すぎる。おまけにこう暑いと何もする気が起きない。相乗効果で数倍退屈だった。

「・・・・・・・・・・暇だ」

「そのセリフ何度目だ？そんなに暇ならお前も本でも借りてくりゃどうだ？」

「読む気になれねえ・・・涼が欲しい」

「ったくうるせー奴だな、とにかくあたしの邪魔だきゃすんなよ」

「わーってるって・・・」

不毛な会話はここでいったん途切れ、再び二人の間に沈黙が訪れた。風になびいて風鈴が涼しい音を奏でるが、ジンの体は全く涼しくならない。

しかしこの後、ジンにとって願ってもない素晴らしい涼が訪れるとは、知る由もなかった。

それからさらに時間が過ぎて、ジンはいつものように煙を吐き出した。

事件はその直後だった！！

ザリ・・・ザリ・・・

店の外から聞こえてくるどこにでもある何気ない砂を踏みしめる足音、ジェットは特に聞こえてもいないし気にもならなかったが、ジンだけ違った。突然目を見開くと額から暑さとは全く違うタイプの汗が噴き出してきた。視線が店の外へ向くと、そこには全身に白い布でくるまれた人が立っていた。顔は全く見えていないが、アイツから漂う気配にジンは不覚にも覚えがあった。もしもこの間がビンゴだとしたら、最高にヤバイかもしれない。

「・・・どうしたんだジン？」

「・・・用事思い出した、先帰るわ」

「?・・・おう」

ジンは急いで器の中身を口の中に放り込むとコートをはおうと急いで窓の縁に足を引っかけた。なんでそんなところから出ていくのか不審に思うが、理由はすぐにわかった、と言うより分からされた・・・。

「見つけましたわああああああ！！！！」

布の向こうから、甲高い女の声が店中に響いた。直後ジンの背中が氷でなでられたようにゾクッと震えた。しかし振り返りはせず、窓から店の外へ飛び出していった。白布も急いで窓へ駆け寄るが、そこにはすでにジンの姿はなかった。

呆気にとられてメガネをズリ落としてしまったジェット、白布は窓から離れるとキッとそのジェットを睨みつけてきた。

「あなた、あの方とどういうご関係で？」

「いや・・・何というか仕事の同僚というか、同じ目的で旅してるツレって言うか・・・」

「ああ、あなたが例の？私のジンさんがお世話になっております」

この突然のセリフと、次に白布を脱いだ姿にジェットは二重で仰天させられた。栗色の髪にやや垂れ下がった瞳、風貌もそこそこの巷にいうところの美人と言えるくらいの、しかも妙齢の女性だった。その女が、何で急に私のジンが・・・とか言い出すのか訳が分からず頭の中が本格的に混乱してきたもんだからジェットの頭の中はパニック状態だった。

「えっと・・・あんただれ？」

「はい、私ガーネットと申しまして・・・あら？」

そのガーネットと申す女性、頭を上げたかと思ったら今度はテーブルの上に視線が向いてしまっている。つられてみると、視線の先にはジンが今まで吸っていたタバコの吸い殻、いわゆるシケモクの山が築かれた灰皿があった。ガーネットは灰皿を拾うと、またもジェットをキッと睨んできた。

「この吸い殻・・・まさかあなたの？」

「冗談じゃねえ、アタシヤタバコ吸う趣味なんざねえ」

「スンスン・・・この匂い、すべてジンさんの吸い殻で間違いなくて？」

「お、おう・・・」

シケモクの山に鼻を近づけてにおいを嗅ぐとはとてもシュールな光景だと思ったが、この次はもっとシュールなものを見せられた。

ガーネット何を思ったのか、吸い殻を一つ摘まんで持ち上げると・・・そのままフィルターをパツクリと啜えてしまった。改めて言うのもなんだが、それは間違いなくジンが今まで吸っていたタバコの吸い殻なのだ。これを承知で口に啜えるとは…考えるだけでもおぞましい行為でしかないのに、彼女は平気でやってのけおまけに何だか妙にうっとりとしたように顔を赤らめている。

「ああ・・・ジンさんの唇の味・・・嬉しい♡」

今度はそんなセリフを吐きながらタバコを丹念に吸い尽くし、口の中でなめまわしているものだからジェットは全身に鳥肌が立った。一瞬で判断できてしまう、「こいつはいろんな意味でヤバイ」と。

「おっといけない、幸せに呑み込まれてしまったわ。これ、みんな貰いますね、ごきげんよう」

ガーネットは吸殻を持参していたビニール袋にすべて流し込むと、ジンの後を追うように窓から外へ出て行ってしまった。ジェットもしばらく窓の外を眺めるが、途中からもう何が何だか分からなくなり・・・全てを忘れ去るためにもう一度読書に集中することにした。

忘れよう・・・そして何も見なかったことにしよう。

それからのジンは、過酷を極めていた。

「待ってくださいませジンさああん！！」

「来んじゃねえええええ！！」

ジンは町の中を必死に逃げ回った。そしてガーネットはそのジンの後ろを追いかけていた。あれから二人は意外とすぐに見つかってしまい、一瞬にして青ざめ逃げ出したジンを、顔を真っ赤にしてガーネットが追いかけてきたのだった。

この勝負ジンにとってみれば分が悪い、残念ながらこの街は逃げ回るのに適していなかったのだ。町の面積が広いのはいいのだが、それに対して建物の数が少なく隠れられる場所が少ない。建物自体もそれほど高い高層建築物がないので逃げられる場所も限られる。そして町の道路が単調であること、即ち道が入り組んでいないから追っ手からまくのはとても難しいときたもんだ。

しかしそれでもジンは走り続けた、ジンはあの女を知っている・・・場合によってはドクターをはるかに上回るものを持っているので何が何でも捕まるわけにはいかなかった。

とか何とか言っているうちに、いつの間にかジンの逃げ込んだ路地は袋小路になっていた。猛スピードで壁に向かって突進したが、地面を踏みしめながら壁を蹴ったおかげで怪我はしなかったが、怪我よりもっと厄介なものが道をふさいでしまっていた。

「ククク・・・ジンさん、もう逃げ道はありませんことよ？」

「・・・」

「観念して、私との約束を果たされるのです！」

ネズミを追い詰めた猫が、ついに襲いかかってきた。しかしこの鼠は往生際が徹底的に悪い。ジンはやむを得ず剣を抜くと、壁を切り裂いて無理やり新しい抜け道を作りそこから逃げ出した。ガーネットはそれでも諦める事無く、ジンを追いかけて続けた。

あれから町中を飽きるほど駆けずり回った。屋根を飛び越え、民家へ侵入し身を潜め、道を文字通り切り開き、時にはありがちでベタな方法だが樽や壺の中にまで隠れて必死にやし過ごした。

それでもガーネットは諦めることをしなかった。ジンがどこへ逃げようが、どこへ隠れようが、まるで訓練された軍用犬のようにジンを見つけ出し襲いかかろうとし続けたのだった。

。

時は過ぎて、ガーネットは建物の屋上の扉を開け、屋根の上へと出た。そこでは上半身裸で息を荒らげ、足の上に岩を乗せた状態で片腕で逆立ちし、なおかつ腕立て伏せをしているという何とも汗臭い男がいた。辺りを見回しても、どこにもジンの姿は見えない。どこへ消えてしまったのか実に不思議がるまま、目の前の男に情報をもらおうと話しかけた。

「失礼します・・・つかぬ事をうかがいたいのですが」

「フン！・・・フン！・・・フン！・・・なんだ？今見ての通り忙しいのだが」

「この辺りで、髪の高い眼鏡をかけた、黒いコートを羽織った御仁を見かけませんでしたか？」

「フン！・・・フン！・・・知らん」

男は全く興味無さそうにありのままで答えると、ガーネットはさびしそうにうなだれて今来た扉の向こうへ消えてしまった。

男は腕立て伏せを続けながら気配を読み、完全にあの女の気配が消えたところで腕立て伏せを止めた。

「・・・もういいぞ」

男は呟くようにそう言うと、逆立ちからもとの姿勢に戻り、岩を床の上に落とした。すると岩の表面に縦の切れ込みが入った。どっころしょと年齢と感じさせる声とともに岩の中から生まれたのは孫悟空でもなければ桃太郎なんかでもない、ジンだった。

ジンはついさっきここまで逃げてきた、その時岩を担いでスクワットをする虎眼と鉢合わせる。事情の説明もそこそこに岩を半分に切り落とし、中身を石鍋でも作るかのように割り貫くと中へ避難、虎眼には何食わぬ顔でそのままトレーニングを続けてもらいガーネットの追跡から何とか逃れたという仕掛けだった。しかし岩の中は想像以上に蒸し暑く、おまけに狭いゆえにジンの肌には虎眼と同じくらいの汗でビッシヨリになっていた。

「暑ちい、とりあえず助かったわ」

「あまり俺の鍛錬の邪魔をしてほしくなかったがな・・・まあたまにはいい」

「悪かった、オレじゃあ行くわな」

汗をぬぐうとジンはそのまま建物の屋根伝いに逃げようと思ったのだが、今度は別の邪魔が入る。逃げようとしたその時に虎眼がジンのコートをつかみ離してくれなかったのだった。

「・・・おい離せよ」

「俺にここまでさせたんだ、いきなり現れたかと思ったらいきなり追われてるから助けてくれなどと・・・そんなことで俺が納得するか？」

「う・・・」

「話してもらおうぞ・・・あれは誰で、貴様とどんな関係がある？」

「・・・聞いてどうすんの？」

「話したくないなら別にかまわない、ただ次はもうないぞ」

力強い眼光を放つ虎眼の眼力に押されたジンは、頭をかきむしりながらうつむいてしまった。この街に居る限りあの女はまた目の前に現れる可能性が高い、だったらこの身を守ってくれる存在は必要だしそれが虎眼とあれば心配する要素はほとんど消えてくれる。

タバコを加えて火をつけると、ジンは仕方なくあの女とのなれそめを語りだした。

3年前、当時19歳だったジンは地元ラプチナで自堕落な生活の日々を送っていた。必要最低限の活動のみを行い(主に料理、釣りなどの食料調達、洗濯など)後の時間は毎日本を読んだりその辺をフラフラしてばかりだった。

とある日、いつものように家で本を読んでいるところに親父が飛び込み、自分にとって幸せなひと時を邪魔する。この話が、すべての問題の発端だったのだ。

「オイジン、また働きもせずそんなグータラしているのか」

「オレがどんな生活しようが勝手だろ、ったく」

「そういうことを言うな。それよりもなジン、今日もまたいい話を持ってきたぞ」

「パス・・・」

「なんも言っとらんだろ」

「うるせえ、どうせまたどこかへ働きに出るなんて書いてある求人票でも持ってきたんだろ？切り刻んでメモ用紙にでもしちまえ」

「フッフッフ・・・今日は違うぞ」

親父は気色悪い笑みを顔いっぱい浮かべると、手に持っていたものをテーブルの上に叩きつけた。ジンもチラッと覗いてみるとそれは確かに今まで散々見せつけられてきた仕事の求人票などではない、上等なハードカバーで作られた大きな本のようなものだった。見たことのないものに興味を持ったジンは読んでいた本を閉じると、それを手に取り中身を開いた。しかし中身は本ではなく、名前と写真が貼ってあるだけの本だったので少々ガッカリ。中身は1ページしかなくうえにたった一人の女の顔が何枚か貼ってあるだけだ。興味の失せたジンはすぐに本を閉じると元の位置へ投げ落とした。

「なんだこれ？」

「ジンよ、もしこの話を飲むのならもう金輪際私はお前に仕事に就けなどとは言わないことを誓おう」

「は？」

「ジン・・・そこに載っている女性と見合いをしろ。そして男として身を固めろ！」

一瞬何を言っているのかわからなくなり、ジンは無言になった。少し時間をおいて頭の中で整理がつくと、また自分の本を拾って読みふけりだす。

「ぜってーやだ」

「ジン！なぜ見合いを断る！？」

「オレみたいなやつがいきなり所帯持てってか？ジョーダンにしては笑えない話だな」

「せめて会ってみる気はないのか？」

「ねえ」

「即答か・・・と言ってもだなあ、実はもうここに連れてきてるんだ」

「は？今なんつった？」

ジンが聞き返すより早く、親父が玄関を開けると・・・その向こうから今チラッと見たさっきの写真の女が立っていた。わざわざこのために合わせたのか知らないが、少しめかした格好をしている。

「はじめまして・・・私ガーネットと申します」

「・・・おいクソ親父？」

「それじゃあジン、私は今晚外で飲みながら一泊してくるから、二人で仲良く夜を過ごして仲良くなるんだぞ」

「オイ待てコラ殺すぞ！！」

玄関の向こうへ消えた親父を追いかけようと椅子から飛び降りたが時すでに遅し、あろうことか玄関が外側から鍵かけられ出ることができなくなってしまっていた。

あのおやじ、今回は相当本気のようにあり徹底定期にジンに見合いをさせる気のようにだった。(もう色々ぶっ飛んでるが気にしないで)

とにかくにも、二人のお見合い(?)は始まってしまった。二人はテーブルを挟んで向い合せに座るが、ジンは絶対に目を合わすまいと抵抗し本を読み続けることにした。このまま徹底的に無視し続ければいずれ向こうから「自分たちは合わない」と悟り、このお見合いはやめようと諦めてくれるはずだ。とことん悪い印象を植え付けてやる。

．．．

．．．

5分が過ぎた、ここへきてジンが違和感を覚える、何か妙なものを肌いっぱい感じて読書に集中できなくなってきた。視線を感じる、ものすごく近くからだ．．．。嫌な予感しかしなかったが、念のためチラッと視線を動かしてみた。

「．．．？」

「ジィ．．．」

．．．見てる。表情一つ崩すことなく、むしろジンと視線が重なったとたんニッコリとほほ笑みだしたくらいだ。ジンは少し気味が悪くなり視線を自分の本へ戻す。しかし一時になってしまったこの感覚はもう拭えるようなものでもなかった。どんなに時間がたってもこの肌を刺すのにも近い視線は一向に途切れることはない。

どうすればいいのだろうか．．．そう考えている時ようやく名案が浮かんだ。

トイレに籠ってしまおう。

さっそくジンは本を閉じると、そのまま席を立ててトイレへ向かおうとした．．．がなぜかガーネットも同時に席を立つと、ジンの後ろへピッタリ付いてきてしまった。

「．．．何？」

「いえ、どちらへ行かれるのかと思ひまして」

「．．．便所」

そういうと彼女は潔く引き下がってくれた。このまままさか便所の中までついてこられたらどうしたらよいかとも考えてしまったが、考えすぎで済んでよかったと思いジンはトイレの中で引きこもってしまうのだった。ザマァ見やがれハハハのハァってか。

30分が経った。いくらなんだってこっだけ長い時間一人だけ放置されればアイツだって退屈になって居眠りの一つもしているころだろう。その頃合いを図ってこの家から逃げ出そう、床板割り貫いて縁の下から脱出すれば何とかなるだろう。そう決意したジンはさっそく静かに戸を開けて出便所から出た。

「おかえりなさい」

「っ！！？」

ところがどっこい、予想もしていなかった事態が起こってしまう。彼女は退屈になって眠っているどころか、便所の戸のすぐ目の前にまるでジンを出迎えるかのように立っていた。これにはジンも一瞬動揺を隠せず手にしていた本を落としそうになってしまった。

「・・・いつからそこに立ってたんだお前？」

「ずっとです」

「・・・ずっと？」

「ずっと」

ジンが便所に籠ること30分、その間こいつは一步たりとも動かずにここで立ちっぱなしというわけかと思うと少しの罪悪感と共に背筋がゾツとした。

仕方なくリビングの元痛椅子に座り直して本を読もうとすると、今度はガーネットが行動に出てきた。ジンが座ると同時にジンの隣の椅子に手をかけ、そのまま座ってしまったのだ。今度は急に近い距離になりジンはますます嫌な予感を感じ、さりげなく席をズラしながら離れようと試みるが、ガーネットは物差しで測ったかのような正確な距離から離れようとせずジンにくっついて移動してくる。

頭が混乱してきた。もうコイツから離れる方法無いものかと思うと頭が痛くなってくる。

「・・・ねえジンさん」

「・・・(こうなったら無視だ無視！！徹底的にだ！！)」

「運命って信じますか？」

「・・・・・・・・・・は？」

突然何をトチ狂ったことを言い出すのかと思い顔を動かしガーネットの方を見ると、彼女と全力で目が合ってしまった。しかも彼女の顔はほんのりと赤く染まり、瞳も潤んでいる。そっとジンの手を握ってきたときなんかには今日この日一番で、ジンは最っ強に嫌な予感を感じた。

「私は、信じます」

「え・・・あ・・・そう」

「どんな形であれ、私はあなたに出会えた」

「だから何？」

「一目見たその時、ジンさんは私の心を盗みました」

「窃盗に覚えはねえぞ」

「これは運命、私とジンさんは永遠に結ばれる運命・・・そう、それはまさに運命の赤い糸」

「いい病院紹介してやろうか？主に頭とかの」

「ジンさん！！」

ついにガーネットが攻撃しにかかった。つかんだ腕を引っ張り、ジンのバランスを崩すとそのまま椅子から放り落とし、今度はその上にガーネットが乗っかりマウントポジションを手に入れたのだ。焦るジン、ウツリとするガーネット、フラグのゲージは馬よりも早く加速する。

「ジンさん・・・お慕いしております」

「重いから速攻退け・・・」

「ジンさん、今日この瞬間、私のこの身体にある全ての初めてを捧げます」

「ちょっ・・・ふざけたこと言ってねえでさっさとどけ、頼む！！」

「ジンさん・・・レッツ子づくり！」

ついにガーネットの中にある全てのリミッターが解除された模様だ。妖艶な表情を崩すことなくジンの服の前ボタンを外すと、今度は自分の服にも手をかけた。このままでは確実にヤバイ、ジンが大切にしてきたものがすべて奪われてしまう。

「・・・つうことがあってな、二日は家に帰れなかった」

「ああ・・・心中察する」

あれ以降ジンはあの女を敵視するようになった。村にいたころは時々家まで押しかけその度に追い返したり返り討ちもしたが、アイツの執念は尋常ではなかった。だが転機が訪れたのがその半年後、彼女の家族が家庭の事情でクロニケル大陸へ引っ越すことになったのだ。当然彼女もクロニケル行きになっているため、それからはもう一度も襲われることがなくなったのだ。

その悪夢が今、ここに再臨しているのだからさあ大変。

「事情は分かった。俺も協力してやろう」

「本気で恩に着る・・・アイツだけはマジで御免だ」

世間一般の男連中から見れば女に追いかけるのが苦痛と感じる割合は少ないのだろうが、虎眼はジンの気持ちに賛同する。

とにかく何はともあれ、この町からはできるだけ早めに出た方がよさそうだ。車の整備はまた別の町に移動した時にでも頼んで今日中にここを出よう、二人はそう決めた。直後、二人は同時に背中を氷でなでられるような不審な気配を感じ取った。

気配のするのは例の階段の入り口、二人が振り向くと怪しい視線がこちらを覗いていた。あの妙な熱のこもった視線の正体は・・・もちろんガーネットその人だった。

ジンは顎が外れて愕然とし、虎眼は激しいショックを受けた。戦闘のプロ中のプロ虎眼が、まさかこんな近距離にいる人間の気配を読み取ることができないとは・・・相手はただの一般的な女だと思うとショックは倍増する。

・・・ってそんなこと言っている場合ではない！！

「・・・・・・・・(ガクガク)」

「・・・・・・・・(ショック)」

「・・・・・・・・見つけ～た(超ニッコリ)」

「アアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

ジンは悲鳴を上げると、もう後先のことなど考えずに建物の屋根から飛び降りて逃げた。ガーネットもその後を追うように走り出したが、虎眼とすれ違う瞬間足を引っかけられ盛大に転んでしまった。ぶつけてしまった鼻を押さえて振り返ると、いつにも増して険しい表情を見せる虎眼がガーネットを見下していた。

「あなたさっきの・・・何のつもりでした？」

「悪いとは思っているし貴様に恨みもない。だが残念なことに見過ごすことができなくなった」

そう言いながら虎眼は2、3歩離れ、スッと戦闘態勢に構えた。女に拳を振るうのは決して本意ではないが、あの話を聞かされて頷いてしまった以上ジンの肩を持つ他ない。何よりあれだけ取り乱したジンを見たのは初めてなわけなのだから、今ここでこの女を何とかしなければならぬのもジンの為であり、同時に修行不足を垣間見せられた自分の為でもある。極論してしまえば自分たちの邪魔をするなら排除する・・・それだけだ。

「クスクスクス・・・私に勝てると思って？」

「・・・寝言は寝てから言ってもらおう」

「あなたみたいな坊やと一緒に寝るつもりはなくてよ？」

非常に挑発的な態度に一瞬イラッとしたが、ここで取り乱したりなどはしない。逆に挑発しかえしてガーネットを誘った。

ガーネットが起き上がると物凄く余裕の笑みを浮かべ、虎眼を前に構える。

カンカンカンカンカンッ！！

「・・・よし、完璧！」

ここはどこかの誰かが所有している倉庫の中。ここには小麦粉の入った袋と大量の藁しかない。ジンは町の中を走り回っている時にここを見つけとっさにこの中に身を隠し、ついでに絶対に開かないようにたった一つだけの出入り口を内側から板と釘で打ち付け完全な密室を完成させた。今日はもうここで一晩籠城しようと考えたのだ。虎眼が味方についてくれた以上、もうこれ以上の心配をする必要な無いと考えてはいるのだが念には念を入れる。

時計を見ると時刻は午後4時チョイ過ぎ、飯なんか1～2食抜いたところで死にはしない・・・そんなことより今は疲れてしまった。ついでに少し眠くなってきた。散々走りまわされた疲れがどっと出てきたのだろう、ちょうどここには寝心地のよさそうな藁がたくさんあることだし、せっかくだから昼寝でもしよう。

ジンはコートを藁の上に敷くとその上に寝転び目を閉じた。草の香りと独特の弾力が最高に合い間って、ジンはあっという間に夢心地になってしまった。

「もう無理だ・・・眠い」

「なら私と一緒に寝ましょうか？」

・・・・・・・・・・・・・・・・Waht？

今何か一番聞こえたくない声が聞こえたような・・・・・・・・？

「私たちのファーストベッドがこんな藁のベッドだなんて・・・思い出になりそうですわ」

「・・・え？」

恐る恐る身をよじって振り向けば、信じられないことに目の前にガーネットがいた。藁に少し埋もれながら。

当然この直後ジンは悲鳴を上げて飛び起き、ガーネットから離れて壁に背をぶつけた。ガーネットはと言えは相変わらずの笑顔で藁の中から出てくると、実に楽しそうな表情でジンへ近づいてきた。

「クスククス・・・相変わらずですねジンさん、ここまで女性を焦らして焦らして焦らしぬいて、いざとなると今度はこんな素敵な二人っきりの空間を作ってくれるなんて」

「生憎ここはオレ専用のシェルターでね、一人用だから出てっくんねえか？」

「一人用ならなおのこと、狭い空間の中で密着しあう二人の男女・・・そそりませんこと？」

」

「そういうことならオレが出てってやるからお前一人で閉じこもってる・・・つうかなんでここにいるんだテメェ、虎眼はどうしたんだ？」

逃げることで頭の中が精いっぱいになって気が付かなかったが、あの場で虎眼がこいつを止めに入ってくれたはずなのになぜ何事もないかのようにここまで追いかけて来れたのか全くの謎だ。まさかあの虎眼を倒したわけじゃなかろうが・・・。

「ああ、あの男性だか女性だかわからないお方ね？今頃睡眠薬でグッスリですわ」

とんでもなく信じられなくて顎が外れてしまった。まさかあの虎眼が本当に負けてしまったなんて信じたくない。

でも今ガーネットは虎眼のことを男だか女だかと言っている以上、虎眼が猫眼に変わる瞬間を目撃していることは確かだ。ということは最低でも虎眼はガーネットの前で一度就寝、または気絶したことになるわけなのだから・・・。

ここには窓もなく、唯一の出入り口はさっき自分で塞いだし・・・。

あれ、これ詰んでね？

大切な何かが奪われてしまう直前、倉庫の屋根が突然破壊した。半泣きした顔で天井を見上げると、そこから太陽の光を背に救世主が降臨したかのように見えた。
それは猛スピードで飛来し、空中でゴキッ！と骨を鳴らしながら一言つぶやいた。

「奥義・・・かなり手加減した虎爪撃！！！」（コソウゲキ）

救世主の右手掌底がまだ振り向き切っていないガーネットの横っ面にクリーンヒットし、そのまま藁と共に倉庫の壁をぶち破って文字通り飛んで行ってしまった。

何はともあれ、ジンは救われた。急いでベルトを締め落ちている愛刀を持つとやっと心が落ち着き、その場に膝をついてしまった。

「ナイスタイミング・・・猫眼」

「フウ、フウ・・・いろいろ無念だたヨ」

救世主の名前は猫眼といった。どうも満身創痍らしく、猫眼はみっともなくその場で腰を落としてしまった。その疲労困憊な姿がガーネットとの激戦を予想させる。

「信じられねえな、まさかお前ならともかくあの虎眼が女一人に不覚を突なんざよ」

「ありえない奴だタ・・・拳をぶつけた瞬間体に変な薬を塗た針を刺されるなんテ・・・不覚ヨ」

虎眼ほどではないにしろこいつも武闘家としての自覚があるようで、まさか毒針で負けてしまったことをかなり恥じているようだ。

まあ何はともあれだ、一応助けられたのだ。ジンはコートを拾うと猫眼の腕を肩に回し、奴が目覚める前にこの場を退散した。猫眼曰く手加減はしたが確実に半日は目を覚まさないとか太鼓判を押してくれた。

今はそれを信じて宿屋へ向かい、すっかりクタクタになった猫眼をドクターに預けて今日中にこの町を出ることを全員に話した。当然理由は何も話さずに、だ。

深夜11時、ここは諸々の事件が起こった倉庫より少し離れた場所にある瓦礫の中。壊れた板切れと藁の山をかき分け中から誰かが現れた。

顔の半分が赤く腫れ上がり少し血も流している彼女はガーネットだった。空を見上げると真上にはきれいな双子の月が昇っており夜の世界を優しく照らしてくれている。

「・・・ここはどこ？私は誰？こんなところで何をやっているの？」

・・・この日を境に、ガーネットの心の中からジンへの想いはきれいサッパリ消え失せた。

とても大事な何かと一緒に・・・それはもうきれいサッパリ・・・何もかも。

完